

9年間の子どもの成長を支える小中連携の在り方

2013. 3

山形県教育センター

は し が き

震災後、私たちにとって、「絆」「つながり」「かかわり」「連携」「協力」などが世のキーワードとしてことのほか意識されるようになってきた。私たちの日本は、個々の力だけでは、物質的にも精神的にも生活が支えられない時代に入ってきていることを物語っているかのようである。

振り返って、学校教育について考えてみると、「学力低下」「不登校」「特別支援教育の充実」「生きる力不足」「コミュニケーション不足」など、課題は枚挙にいとまがない。具体的な課題としては、「小1プロブレムの解消」「中1ギャップの防止」「学力の充実」など、目の前には解決すべきことが多い。

では、これらを打開し、本県教育の目標である『知徳体が調和し、「いのち」輝く人間の育成』を進めていくには、どのような視点で教育を見直していけば解決の糸口が見えるのだろうか。

本県教育の先達である澤井昭男氏が、20年以上も前に、これから求められる授業や教育活動の在り方として「ともに〇〇し合う」ことの大切さについて説いている。

近年の教育界でよく使われる「コミュニケーション」「コラボレーション」「ノーマライゼーション」「インクルーシブ」などのキーワードは、この考えに通じるものと捉えることができる。閉塞感の漂う教育の今日的な課題を改善していくための視点になりうるものと考ええる。

そこで、私たちは今日的な課題解決を図り、健やかな子どもたちの育ちや学びを支えるために、いつ、どのような「ともに〇〇し合う」ことが重要なのかを探ろうと考えた。

そうした時に、「ともに〇〇し合う」ことを、すでに使われて久しい「連携」という言葉に置き換えることができる。この「連携」を、学校における教育活動改善の大きな視点と捉え、研究課題に位置付けたとき、異校種間の連携として「幼保小連携」や「小中連携」、「中高一貫（連携）」などがあり、「小小連携」など同校種間の連携も考えられる。

本研究においては「小中連携」に焦点を絞り、研究を進めてきた。

本報告書は、本県における小中学校9年間の児童生徒の成長をよりよく支える小中連携の実態を2か年にわたって探り、総合的な小中連携の在り方を考え、学校経営に生かせる研究報告をめざして編集した。本書が、今後の教育実践に活用されることを願う。

平成25年3月

山形県教育センター

所 長 吉田 敏明

報告にあたって

山形大学大学院教育実践研究科
准教授 三浦登志一

■「小中連携」の要請

子どもたちの側に立ってみると、小学校と中学校との間には決して低くはない壁が存在していると言えるだろう。かつて中学校における不登校生徒の増加が問題となった時期に指摘されたのが、子どもたちにとっての高い壁の問題であった。小学校から子どもたちを迎える中学校の教員からすると、特に壁を作ろうとしているわけではない。中学校としてごく自然な形で教育活動を行っているだけだと思われるものが、子どもたちには、抵抗を感じさせるものになっていたということである。「中1ギャップ」の問題は当然のことながら、中学校の教育活動に何らかの変化を要求することになる。しかし、このような学校間の接続の問題を考える場合には、原因を一方の側にのみ限定して考えることは避けなければならない。送る側と迎える側との両者の英知を結集していくことが大切である。

山形県の場合、小中学校をめぐる問題の一つに学校の統廃合がある。「山形県学校名鑑」によれば、平成19年度から平成24年度までの6年間で、小学校で30校、中学校で15校ほどの学校数の減少が見られる。それぞれ10%前後に当たる数字である。その結果、町に小学校と中学校がそれぞれ1校という地域も見られるようになっている。このような学校数の減少の過程で問われるようになっているのが、小学校と中学校の接続の在り方である。そして、そのことを通して小学校、中学校、それぞれの教育をどのように充実させるのかを改めて考えていくことである。

小中の連携は、小学校の教育と中学校の教育の互いの良さの発見・再確認ということにもつながる。小学校と中学校が連携して教育活動をするものの良さは、それぞれが認識してはいるものの、小学校の教員も中学校の教員も、プロとしての意識をもっている。その意識は望ましいことであるのだが、時として他者に対する厳しさとなることもある。小学校の教員から見れば、「小学校で大切に育てたことを中学校では生かしていない」という声になったり、中学校の教員からは、「小学校では十分に育てていない」という非難になったりする。子どもたちをめぐる、教員間の思いの行き違いが生じることになる。これは、結果として子どもたちにプラスにならない事態である。教員たちが互いに関わり合う実践的な場を通して、教員間の共通理解を形成していくことが大切である。そうした理解を土台にして、小学校と中学校の良さを改めて発見し合うような関係の構築が望まれる。

■地域や学校の実情の違い

小中連携に関して、連携の典型的なモデルを一つ取り上げて示すことは難しい。学校がある地域の実情に違いがあり、小学校と中学校の接続のスタイルに違いがあるためである。一つの小学校と一つの中学校との間で実践できていることが、複数の小学校と複数の中学校が複雑に絡む形で接続している学校間で実践できる可能性は低いと考えるのが妥当であろう。したがって、どのような「小中連携」が望ましいのかは、それぞれの学校が置かれた状況に応じて判断していかなければならない。連携を築き上げていくためには、その実情をしっかりと把握することが大切になる。

これは、連携の在り方についての情報を提供する側が留意しなければならない点でもある。多様な状況に応じて選択できるような情報提供を行うことが求められるということである。いろいろな実践についての情報を提供するとともに、どのような取組をするのか、実情に応じて選択していくための効果的な情報提供の方策も工夫する必要がある。

■実践についての評価

教育におけるどのような取組についても言えることであるが、「100%の実践」はない。私たちが教育活動に取り組む中では、これで万全であり直すべきところはないという感覚をもちにくい。もっといいやり方があるのではないかという感覚がどこかに残るものである。このような感覚は、よりよいものを求めようとする志向を生み出す原動力となる。現状に満足せずに、一步でも進もうとする教員や子どもたちの意欲を生かすものである。しかし、気を付けなければならないのは、それが恒常的な「不足感」につながることである。多くのことを実践しなければならないと考えすぎるのは危険である。学校として取り組めることには限りがある。他校で実践しているよいものを全て取り入れることが、よりよい教育活動になるとは限らない。取組をプラスしていくことが、結果としてのプラスになるのかどうか分からない。そこで、「評価」を充実させることが大切である。学校評価の中に小中連携に関する項目を設けて、継続的に成果と課題を捉えていくようにしなければならない。さらには、関係する学校間で互いの評価を交換し合うなど、評価を連動させることも効果的である。

今回の調査研究の特徴の一つとして、「学校の実践」が具体的に県内各地から集められていることが挙げられる。実践の具体的な内容は、調査研究担当者が直接学校に出向いて、「生の声」として得た情報に基づいて整理している。その取材活動を通して、担当者たちは、調査研究を行う前の時点よりも「小中連携が実践されている」という感触・実感を得ている。実践している学校としては、それほど高く評価していない活動が、他者の眼には非常に魅力的なものに見えたという事例があった。学校としては「小中連携」としてあまり意識していない活動に、小中連携の姿を発見するような事例もあったようである。新鮮な眼で見ることで新たな気づきが生まれたり、価値の再確認がなされたりしている。学校の教育活動について、広く情報を公開していくことの意義がそこにあると思われる。

■全体のデザイン

「小中連携」というキーワードから学校の教育活動を充実させようとする場合、第一に必要なのは、学区・学校が全体としてどのような目標を設定するのかを明らかにすることである。全体像のデザインを描くことである。小学校に入学してきた子どもが、義務教育段階を修了する9年後に、どのような姿となって卒業していくのかを描くことである。その目標に即して、小学校と中学校がどのように連携するのか、具体化を図っていくようにしたいものである。実践が先行する形で取り組まれているところも、どこかの段階でデザインを描いてみると、さらに充実した取組にしていくことができると思われる。大きな見通しをもつことで、実践の歩みはさらに着実なものになる。

今回の調査研究では、「まなび」「そだち」「そしき」の3つをキーワードとして実践例を紹介している。構想を描き、具体的な実践を展開していく上で、このような視点を参考にいただければと思う。そして、それぞれの地域や学校の実情に応じた切り口を探り、工夫していくことが大切であると考えている。

「9年間の子どもの成長を支える小中連携の在り方」の研究報告を行うにあたって、改めて感じたことは、山形県で展開されている教育活動の確かさである。県全体の取組として小学校と中学校の連携が強力に推し進められているわけではないにもかかわらず、県内の各地にそれぞれ地域の実情に沿った小中連携の姿を見ることができた。県の教育をリードする先生方による研究と構想に基づきながら、各学校の先生たちが地道に実践を展開していることがうかがえる。誠実な教育の在り方が、小中連携という一つの窓にも明らかなものとして映し出されている。

9年間の子どもの成長を支える小中連携の在り方

山形県教育センター

目 次

はしがき

報告にあたって

第1章 研究概要	5
1 研究主題	
2 主題設定の理由	
3 研究の内容	
4 研究の計画	
第2章 アンケート調査と集計結果	6
1 アンケートの概要	
2 項目別集計結果	
3 連携の規模別にみる県内の現状	
4 連携相関図	
第3章 アンケートの分析（現状と課題）	22
1 特色ある小中連携の取組内容の分類	
2 特色ある小中連携の取組方法の分類	
3 取組の内容と方法との関連	
4 小中連携で充実させたい取組内容と方法	
5 考察のまとめ	
第4章 実践事例の紹介	27
第5章 研究のまとめ	86
1 小中連携を推進していくための視点	
2 小中連携を推進するための方法及びその成果	
3 おわりに	

第1章 研究概要

1 研究主題

義務教育9年間の児童生徒の学びと育ちを支える小中連携の在り方について、本県の現状と課題を把握し、中1ギャップの未然防止も含めた本県の豊富な実践事例を収集し、小中連携の充実を図るための取組について考察し提言する。

2 主題設定の理由

我が国の急速な少子化は、子どもたちの成長にも少なからず影響を与えていると考えられている。生活体験の不足や人間関係の希薄さは、子どもたちの学びの機会を減少させ、心身の発育・発達や自立を遅らせているといっても過言ではない。また、思春期を迎える小学校高学年から中学校にかけては、心身の成長や変化が著しい時期であり、精神的に不安定な時期でもある。その結果、不登校児童生徒の増加や、校種間の接続期に、小中学校間の様々な違いから、子どもに無用な戸惑いや不安を与える「中1ギャップ」といった現象が浮かび上がってきている。

そこで、小学校から中学校への発育・発達を踏まえ、小中学校間の違いによる戸惑いや不安を子どもたち自身が乗り越えていけるように、教師が支援することが必要になる。そのために、義務教育9年間の学びや育ちを一体のものと捉え、小学校と中学校がそれぞれの教育の特性を互いに理解しながら、連携して系統的で継続的な教育を進めることが重要である。

本研究は、本県の教育目標である『知徳体が調和し、「いのち」輝く人間の育成』に迫るために、学校が家庭や地域とかかわりながら、子どもたちに「確かな学力」を身に付けさせ、「豊かな心」を育み、「生きる力」を育成するための一助となることを目的としている。

本県の全小中学校の協力を得て、小中連携における小中学校の意識や現状、抱える課題を把握して分析や考察を試みるとともに、優れた実践事例を収集して紹介する。また、「まなび」「そだち」「そしき」をキーワードとして、本県の小中連携の実践事例を集約し、連携を推進するための視点、方法などを整理して示す。

3 研究の内容

- (1) アンケート調査による本県小中学校の現状把握
- (2) 小中連携に関する教員の意識調査
- (3) 特色ある実践事例の収集
- (4) 全国の先進的実践事例の取材

4 研究の計画

- (1) 1年次
 - ・ アンケート調査による本県小中学校の現状把握と分析及び考察
 - ・ 小中連携に関する教員の意識調査と分析及び考察
 - ・ 全国の先進的実践事例の取材
- (2) 2年次
 - ・ 本県小中学校の特色ある実践事例の収集、取材
 - ・ 報告書の作成

第2章 アンケート調査と集計結果

1 アンケートの概要

① 調査の目的

当センターでは、今年度からの2年計画で義務教育9年間の子どもの学びや育ちを支える小中連携の在り方について研究を行う。これにあたり、本県の小中連携の現状や課題を把握し、よりよい連携の在り方を考えるために本調査を実施する。

② 調査対象 県内全公立小中学校

③ 調査実施年月 平成23年10月

④ 調査内容

基礎データ

学校名			
記入者（職・氏名）	職	氏名	
学級数（特別支援学級を含む）	学級		
児童生徒数	名	教職員（県費負担職員）数	名

・小学校においては進学先の中学校名を、中学校においては進学元の小学校名をお書きください。

学校	学校
学校	学校
学校	学校

質問1 小中連携は必要だと感じますか。あてはまるものを一つ選び、○で囲んでください。

ア 強く感じる イ ある程度感じる ウ あまり感じない エ 全く感じない

質問2 現在小中連携の取組を行っていますか。あてはまる方を○で囲んでください。

ア 行っている イ 行っていない

※「ア」の場合は以下の質問3～8に御回答ください。「イ」の場合は質問6～8に御回答ください。

質問3 現在の小中連携の取組がうまくいっていると思いますか。あてはまる方を○で囲んでください。また、その理由をお書きください。

ア うまくいっている イ うまくいっていない

（その理由）

質問4 小中連携の取組を今後どのようにしていこうと考えていますか。あてはまるものを一つ選び、○で囲んでください。また、その理由をお書きください。

ア 今より連携を強化していきたい イ 現状維持でよい
ウ 連携を縮小化していきたい。

（その理由）

質問5 特色ある（主な）小中連携の取組を御紹介ください。（3つ以内）

※取り組まれた実践をより詳しくお書きください。

取組名	ねらい	主な内容		取組にかかわる人	取組の成果と課題
		実施時期や年間回数			
		実施対象者			
		教育課程上の位置づけ			
		具体的な内容			
		指導の重点 ※○で囲んでください。	生徒指導 学習指導 保健安全指導 進路指導 その他		

質問6

・質問2において「ア 行っている」と回答した方は、

貴校における取組に照らし合わせて、今後充実していきたいと考えている連携を、下記のア～ケの中からあてはまるものを3つ選び、○で囲んでください。

・質問2において「イ 行っていない」と回答した方は、

小中連携を今後進めていく場合、どのような連携が大事だと考えますか。特に大事だと考える連携を、下記のア～ケの中からあてはまるものを3つ選び、○で囲んでください。

ア 学習指導の連携 イ 生徒指導の連携 ウ 保健安全指導の連携 エ 児童生徒間の連携
 オ 教職員間の連携 カ 管理職間の連携 キ 地域との連携 ク 小学校間の連携
 ケ その他（ ）

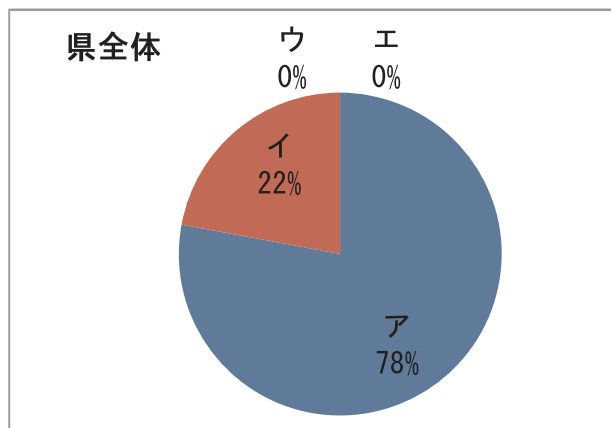
質問7 今後、新たに必要である（または充実させていく必要がある）と考えている小中連携の取組をお書きください。（構想段階のものでかまいません）

質問8 小中連携の取組についての悩み（現在苦勞していること）や他の取組について知りたいことをお書きください。（複数ある場合は複数お書きください）

2 項目別集計結果

質問1 小中連携は必要だと感じますか。あてはまるものを一つ選び、○で囲んでください。

ア 強く感じる イ ある程度感じる ウ あまり感じない エ 全く感じない

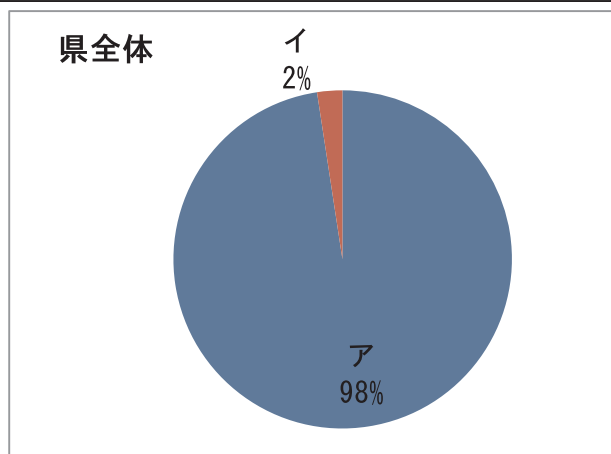


「強く感じる」が約8割、「ある程度感じる」が約2割である。

「あまり感じない」「感じない」は0%で、小中連携の必要性は十分に感じているようである。

質問2 現在小中連携の取組を行っていますか。あてはまる方を○で囲んでください。

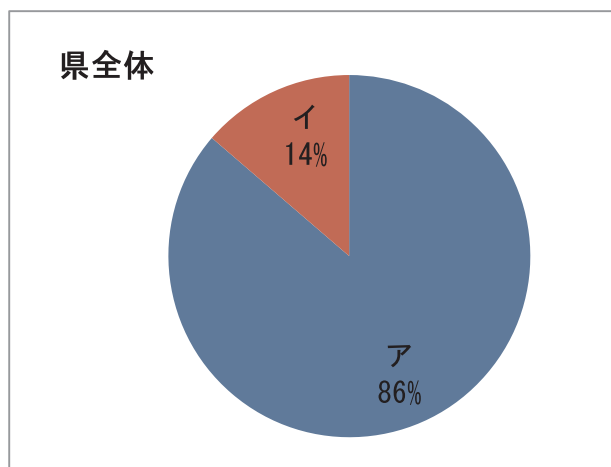
ア 行っている イ 行っていない



「行っている」と回答している学校がほとんどである。県内の学校は、何らかの形で小中連携に取り組んでいるようである。

質問3 現在の小中連携の取組がうまくいっていると思いますか。あてはまる方を○で囲んでください。また、その理由をお書きください。

ア うまくいっている イ うまくいっていない



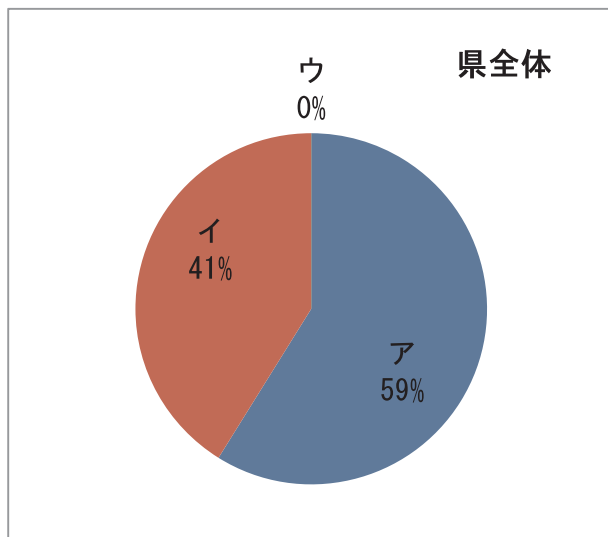
「うまくいっている」が8割を超えている。「うまくいっていない」が14%である。

取組を行っているが思うように効果が上がっていないという記載もあった。

質問4 小中連携の取組を今後どのようにしていこうと考えていますか。

あてはまるものを一つ選び、○で囲んでください。また、その理由をお書きください。

ア 今より連携を強化していきたい イ 現状維持でよい ウ 連携を縮小化していきたい

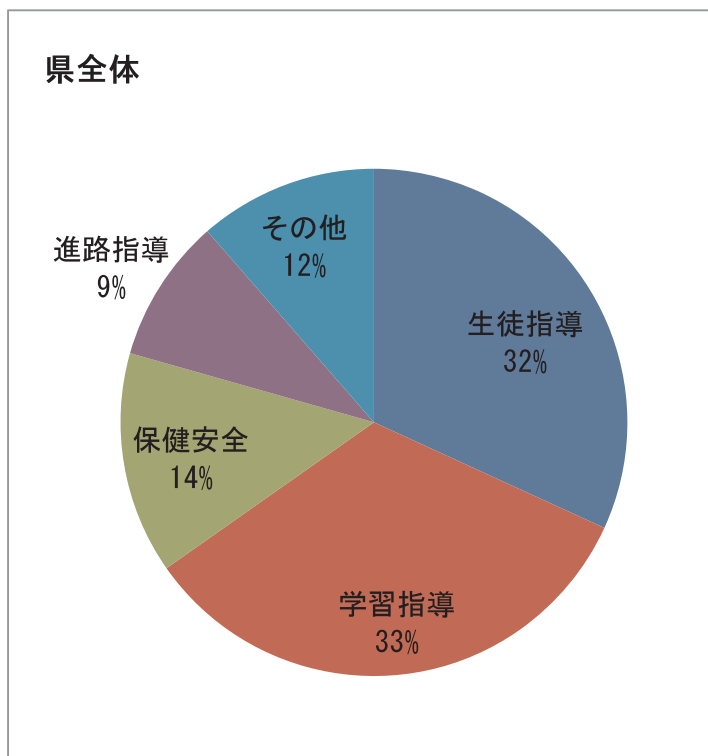


「今より強化していきたい」が約6割である。現状よりもさらに取組を向上させていきたいという意見が多いが、現時点でも取組がうまくいっていないために強化していかなければならないと回答した学校もある。

同じように「現状維持でよい」に関しても、現在の取組が効果を上げているために、このままの継続でよいという意見と、「多忙や時間設定の問題」から、これ以上は取組を強化できないために、現状維持でよいという意見もあった。

質問5 特色ある（主な）小中連携の取組を御紹介ください。

※ 取組を指導の重点（生徒指導・学習指導・保健安全指導・進路指導・その他）に着目して分析し、どの指導の重点が多いのか分析した結果を掲載している。



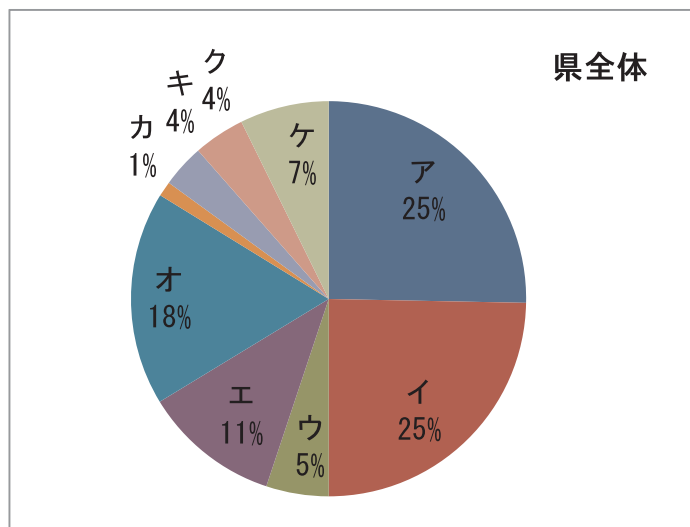
様々な取組がどこに指導の重点を置いて行われているかを分析した結果であるが、「生徒指導」「学習指導」がともに2大重点として3割を超えている。続いて「保健安全」「進路指導」と続く。1つの取組が「生徒指導と保健安全」の2つに重点をおいて行われているような取組もあった。

また、同じような取組でも、その学校のめざす目的によって、指導の重点は違う場合もあった。

質問 6

- ・質問 2 において「ア 行っている」と回答した方は、
貴校における取組に照らし合わせて、今後充実していきたいと考えている連携を、下記の
ア～ケの中からあてはまるものを 3 つ選び、○で囲んでください。
- ・質問 2 において「イ 行っていない」と回答した方は、
小中連携を今後進めていく場合、どのような連携が大事だと考えますか。特に大事だと考
える連携を、下記のア～ケの中からあてはまるものを 3 つ選び、○で囲んでください。

ア 学習指導の連携 イ 生徒指導の連携 ウ 保健安全指導の連携 エ 児童生徒間の連携
オ 教職員間の連携 カ 管理職間の連携 キ 地域との連携 ク 小学校間の連携
ケ その他（ ）



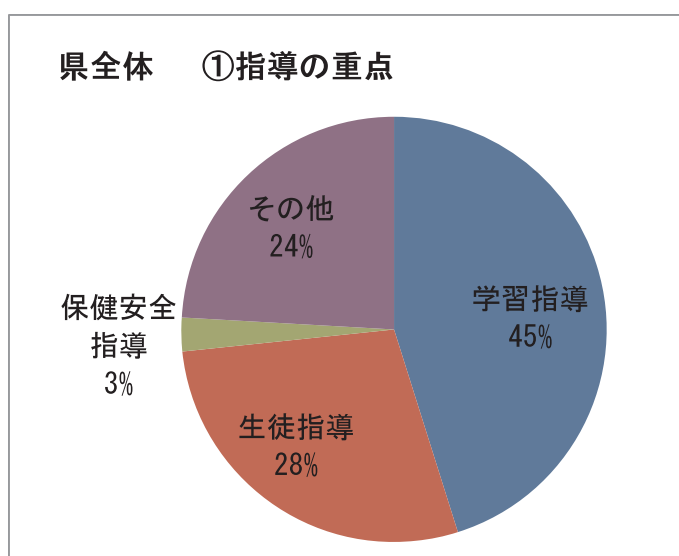
「学習指導」「生徒指導」が多い。続
いて「教職員間の連携」が多い。

「ア 学習指導の連携」「イ 生徒指
導の連携」「ウ 保健安全指導」の 3 つ
は、質問 5 の取組の部分で出てきた「指
導の重点」ととらえ、「エ 児童生徒間
の連携」から「ク 小学校間の連携」ま
でを「指導の形態」ととらえることがで
きる。

この視点でみると、まずは「学習指導
と生徒指導」「教職員間連携と児童生徒
間連携」を充実したいと考えていること
がわかる。

質問 7 今後、新たに必要である（または充実させていく必要がある）と考えている小中連携の 取組をお書きください。（構想段階のものでかまいません）

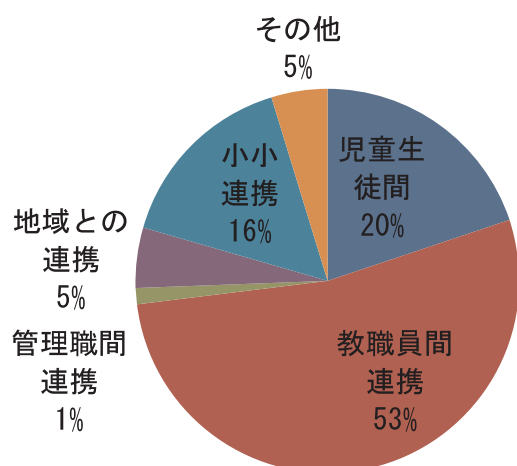
- ※ 質問 7 については質問 6 の選択肢を、①指導の重点（学習指導の連携 生徒指導の連携
保健安全指導の連携 その他）②指導の形態（児童生徒間の連携、教職員間の連携、管理
職間の連携、地域との連携、小小連携、その他）という 2 つの視点から分析を行った。



文章で記載いただいた回答を「指導の
重点」という視点で分析を行うと、「学習
指導」が 4 割を超え、続いて「生徒指導」
が約 3 割である。

「その他」には「特別支援に関するこ
と」や「教職員の意識」について、また
「組織について」の意見が出されていた。

県全体 ②指導の形態



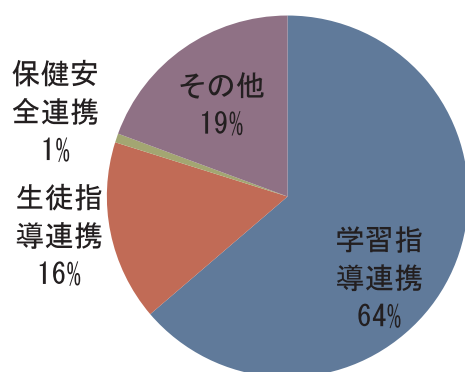
「指導の形態」という視点でみると約半数が「教職員間連携」をあげている。学習指導の連携や生徒指導の連携などにも、まずは教職員間連携を充実させていく必要があると感じている学校が多い。続いて「児童生徒間連携」が20%である。

「小小連携」が16%を超えている背景には、学習指導における外国語活動や統廃合を見据えた連携が背景にあると思われる。

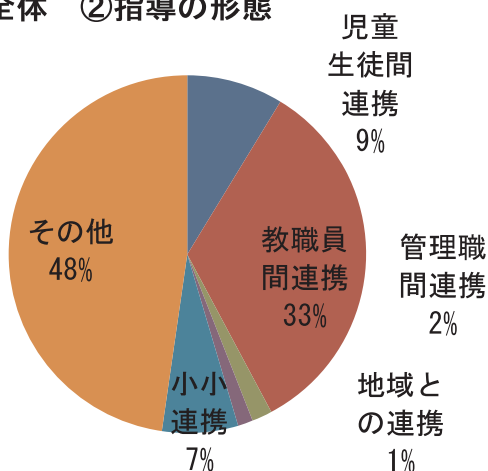
質問8 小中連携の取組についての悩み（現在苦労していること）や他の取組について知りたいことをお書きください。（複数ある場合は複数お書きください）

※ 質問8については質問7と同様に、①指導の重点②指導の形態という2つの視点から分析を行った。さらに、③実践事例（学習指導、生徒指導、保健安全指導、その他）を知りたいという回答が多いためどのような実践事例の要望が多いのかも併せて分析を行った。

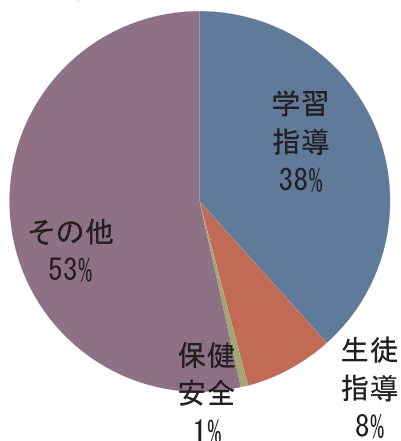
県全体 ①指導の重点



県全体 ②指導の形態



県全体 ③知りたい実践事例



①指導の重点では「学習指導連携」が6割を超えている。

②指導の形態では「教職員間連携」が3割を超えている。その他の48%の中には、悩みという視点から、多忙感や時間設定の困難さなどを回答する学校が多いため「その他」の割合が多くなっている。

③知りたい実践事例では約4割が「学習指導」のものである。その他は「学習指導」や「生徒指導」などの具体的な内容はないが、先進校や他校の特色ある取組を知りたいという記載が多かった。